

動き出した式年遷宮

伊勢神宮の式年遷宮は20年に一度、内宮と外宮で社殿と神宝を新調する神宮最大の神事である。飛鳥時代から引き継がれた建築技術や神宝・装束の形・素材・技法などを次世代に継承する。次回(63回)は2033年に正式決定し、来年から関連行事が始まる。

26年と27年に行われる「お木曳(きひき)行事」では、社殿造営のための御用材が、内宮領では川曳で、外宮領では陸曳で、地元の地域ごとに結成された奉曳団(ほうえいだん)により奉納される。各団では地域の老若男女が、独自にデザインした色とりどりの自慢の法被を着て関連行事に参加する。子どもの頃からこうした行事に参加することで郷土愛が育まれ、伊勢の地を離れている人でも遷宮行事になると大勢が里帰りする。筆者自身、前回の遷宮では内宮領の奉曳団の一員として、御用材をソリに乗せ、木遣(きや)り唄に合わせて「エンヤ、エンヤ」と声を掛け、水しぶきを上げながら内宮に向けて五十鈴川を曳き上った。

お木曳行事は伊勢市の民俗行事として無形民俗文化財に指定されている。川曳ではソリを、陸曳では奉曳車を梃子(てこ)棒や梃子縄で舵をとる技術などを次の世代に伝承する機会となる。伊勢市民にとっては誇りであり、地域との絆を深め、「常若(どこわか)」の精神を次の世代に伝える特別な行事だ。

前回のお木曳行事では、伊勢市民である神領民と全国から応募した多くの特別神領民を合わせて延べ20万人が参加した。毎回、式年遷宮年に向けて参拝者数は年々増加し、前回の式年遷宮年では1420万人と過去最高を記録した。伊勢市では、次の遷宮に向けた観光戦略として、宿泊促進等を目的とした「伊勢志摩せんぐう旅博」の推進や、お木曳行事に向けたまち全体の機運醸成、次世代の観光客の柱となりうる外国人の誘客などに取り組む。一方で課題も多く、2次交通の充実や安全・安心を提供できる環境整備など、観光客の満足度向上を今後の重点施策としている。

地域活性化の大きな転機となる神宮式年遷宮。地域の機運が高まり変化していく様子を肌で感じられることが楽しみでならない。

(コンサルティング事業部 経営コンサルティンググループ 主任研究員 慶徳 亘紀)

毎日新聞「三重～る経済」 2024年5月27日